

趙宋天台と浄土教

——その実践面について——

中山正晃

一

江南の廬山白蓮社におこった慧遠の浄土教は、天台止観の

四種三昧の実践の中に包摂されて、これが中唐天台から趙宋天台へと伝統をもって展開している。また曇鸞によって華北の井州石壁玄中寺におこった浄土教は、初唐の道綽・善導らによって、末法の時機相応の実践運動として、帝都長安に進出し、大寺の浄土院を拠点として、長安はじめ天下各州の開元・竜興の官寺を通じて地方に伝播した。これら南北両地の浄土教思想の交流の形態は、趙宋天台における十六観堂の実践の上にみとめられるところである。

中唐天台の六祖荆溪湛然（七一―七八二）は、天台三大部の研鑽をなし、「諸教の讃ずるところ、多く弥陀に在り」との名句をのこして、四種三昧の実践に阿弥陀仏を主尊として専念称名し、天台教観の上に浄土教的思想と信仰を認容する

態度をとった。それはこの前後に「天台十疑論」、「観無量寿經疏」、「阿弥陀經疏」などが出現することとあわせて、南北浄土教の交流の所産とみることができる。

趙宋天台では天台五小部の研究が数学の中心であったので、天台観經疏が趙宋天台の教観二門を確立する上で重要な地位を占めることとなり、その教学を樹立したのが四明延慶院の法智大師知礼（九六〇―一〇二八）の「観經融心解」（一卷）と「観經疏妙宗鈔」（三卷）であった。これに対して主に天台十疑論の立場からその実践行儀を明示したものが、杭州天竺寺の慈雲遵式懺主（九六三―一〇三二）の「往生浄土懺願儀」と「往生浄土決疑行願法門」の各一卷である。とりわけ四明知礼の「観經疏妙宗鈔」は、天台止観にもとづいて、観經の十六観法（修観法）を論じたものであるが、そのなかで知礼は、「本性弥陀・唯心浄土」という、自己の弥陀の身土に関する見解を表明している。これがやがて趙宋天台におけ

る浄土教学のモットーとなり、北宋から南宋にかけて天台学者や道俗に重大な思想影響を及ぼすことになるのである。

かつて入宋僧俊蒞法師（一一六六—一二二七）は、北峰宗印和尚から法語と唯心浄土説を授かって、これを我国に請来し、洛東泉涌寺に趙宋天台の伝統をもつ十六観堂を移植している。ここに知礼の説く「本性弥陀・唯心浄土」の思想は、趙宋天台におこった弥陀教観の実践道場としての十六観堂において、どのように実践されていたか。また泉涌俊蒞によって将来された趙宋天台における浄土教の実践行儀は、どのような形態をもつものであったか。これらの問題について、現存する俊蒞法師の遺文、『清衆規式并十六観堂記』のなかでも、とりわけ俊蒞と同じく北峰宗印門下の筆頭として、また四教儀備積の著者としても知られる、南宋の天竺住持・古雲元粹の述作になる「観堂長期修懺規式」を取りあげることによって、その実践面を考察してみたいと思う。

二

晩唐五代に散佚した天台章疏は、呉越国王錢氏の外護のもとに高麗や日本にその逸書が求められ、これによっていわゆる趙宋天台の復興をみた。それは唐の中興天台が天台三大部の記をもつて、教学の中心としたのに対比して、天台五小部の究研にその中心が移り、これが山家山外二派の論争とし

て、その特色を発揮するのである。

源清・慶昭のあとにつづく、山外派の孤山智円は、「観経疏刊正記」二卷（佚）を著わして、観経にとく十六観はすべて事観であると主張した。これに対してかねてから五小部の研究はあくまで三大部の教学に立脚し、その実践についても天台止観の立場を厳守すべきことを強調する山家派からは、浄覚仁岳が智円の刊正記を批判して、ここに止観を尋求すべき文のないことを指摘した。かかる両派の論議は、天台観経疏を中心として、観経に説く十六観をめぐる複雑な見解の相違をみるのである。

大中祥符七年（一〇一四）知礼は、「観経融心解」一卷を著わして、一心三観と四種浄土の宗旨を明らかにした。のちに門人の浄覚仁岳と広智尚賢とのあいだに、観心か観仏かの論争をひきおこし、その判決を師の知礼に求めた。そのとき知礼は心性によってかの浄土の依正二報を観察する約心観仏の説をたて、この見解を天禧五年（一〇二二）「天台観経疏妙宗鈔」三卷に詳述するのである。すなわち、止観の観心を重視する山家派の立場からすれば、観経に説く十六観は、摩訶止観にみる四種三昧のうち、浄土の行としての般舟三昧に類するが、弥陀浄土の依正二報を所縁として観することは、観法としては理観であると主張し、天台観経疏の「心観為宗・実相為体」によって約心観仏の論理をたてたのである。しかる

にこうした観法の実践については、かねてから弥陀の依正の事相を観することによって、理観を修証することのむづかしさが指摘されたため、その著には、理の妙観を正行とし、浄業事懺を助行として俱に修すべき旨を力説している。その点については知礼は、すでに大中祥符五年（一〇二二）十月、みずから「結念仏会疏」を作り、道俗を勧化して翌年二月十一日に四明延慶院において念仏施戒会をはじめている。それは道俗一万人を結縁して阿弥陀仏を称念し、菩提心をおこして浄土に往生せんとするものであった。その疏によれば、まず会首二百十人が各自に四十八人を募って、その一人々々が念仏懺願曆子に毎日の念仏の数を記載し、次の二月十五日の念仏会のために、その曆子と淨財四十八文を携えて、四明延慶院の念仏会に参加する作法である。これが常例の年中行事となり、年とともに盛行し、その延慶院の念仏道場は常設の浄土院、十六観堂として発達したのである。この念仏会は北宋から南宋に至るまで百九十年の伝統をもって行なわれたが、爾来江南の両浙地方では在処の寺院に十六観堂をたて、あるいは九品道場を設けることが盛んである。天台観経疏の研究は、事観と理観、観心と観仏の問題をめぐる山家・山外兩派の対峙となったが、その実践面においては四明延慶寺の浄土院などを拠点として、結社念仏の形態をもって広く道俗のあいだに浄土教信仰が展開するのである。しかもこれは

天台宗のみが独占することなく、禪宗や律宗など諸宗のあいだにも普及してゆくとともにその特色があった。

三

鎌倉時代、我國の僧風をなげき律学を求めて宋土に渡った俊芿は、在宋十二年かの地において禪教律の三宗を兼学している。すなわち明州奉化の雪竇中嚴や南宋の行都臨安の近郊、徑山の蒙庵元聰禪師について禪学を修め、四明の景福寺に靈芝元照の法系に属する如庵了宏に師事して律法を学び、北峰宗印講師の名声をきいて、はるばる浙西の秀州華亭県の超果寺天台教院にいたり、宗印の輪下に入って前後八年にわたり趙宋天台の教観二門を精究したのである。

北峰宗印（一一四四—一二一三）は、山家山外兩派の諍論をおこした趙宋天台の上では、山家派の四明知礼の門下、南屏梵臻の第五世・竹菴可観の法嗣である。この南屏系の学風は四明天台の正統派を継承しながら、当時全盛をきわめた南宋禪との調和をはかり、天台と禪とを兼修する態度がとられていた。宗印は可観の門に入って天台の教観を修めたのち、師の命により臨濟禪の五祖法演の会下に参じて印可を得たと言うから、よほど禪宗への関心が深かったようである。

南宋の宗鑑の「釈門正統」（巻七）には、天台祖承のなかに北峰宗印の弟子として、日本俊芿と古雲元粹の二人をあげて

いるが、ことに元粹は、かつて俊苒が臨安府に出京し、天竺寺に滞在したとき、この寺の住持であったので、一層ふかく親交を結んでおり、建保二年（一二二四）夏、その前年に示寂した北峰宗印の真影を、留学僧、良祐の帰朝するの託して、俊苒に贈っているほどの間柄であった。

宋代の仏教は、教禪和合・禪淨一致の宗風が大勢をしめ、ことに靈芝元照による戒律の復興運動の影響をうけてからは、教・禪・淨・律の四宗兼学の傾向がさかんになってきた。入宋僧俊苒が教えをうけた如庵了宏や北峰宗印にしても、ただ単なる律や天台の学匠ではなく、淨土教や禪に関しても深い造詣をもっていたので、俊苒は前後十二年にわたる入宋求法のあいだに、かかる宋代の諸宗融合の学風を身につけて、諸宗にわたる関係文献をひろく収集して帰朝したのである。

四

俊苒はすでに入宋のとき、江南の両浙地方の諸寺院にある十六観堂の実情をつぶさに見聞したので、これを東山の勝地を卜して創建せんと、建保三年（一二二五）「清衆規式」と「東林十六観堂勸進疏」を起草している。けだしこの勸進疏には、かの親鸞聖人の『教行信証』に多大の影響を与えた、南宋の宗暁の「樂邦文類」（五卷）が参考とされており、なか

でもその卷三の記碑に収められる楊傑の淨慈七宝弥陀像記・建弥陀宝閣記や陳瓘の延慶寺淨土院記、清哲の延慶重修淨土院記や元照の開元寺三聖立像記・無量院造弥陀像記などがその基礎資料となっている。

建保六年（一二二八）夏、かねて俊苒の志願であった清衆規式と東林十六観堂は、東山泉涌寺の伽藍のうちにとり入れられて実現するはこびとなった。泉涌寺の「清衆規式」には、「別場の懺悔とは四種三昧および六時に真言行を修することなり」として、承久二年（一二三〇）二月の「殿堂房寮色目」には、その道場建造物として十六観院と真言院をあげている。それによると、

この十六観院は念仏三昧の寂室であり、深禅觀慧の道場である。中央に弥陀殿をたててこれを至尊となし、これをめぐって十六の観堂の部屋ごとに阿弥陀仏の三尺の立像を安置して修懺の道場とする。一人の行者は三ヶ年を期限として寺門の外に出ず、春秋の二季は六時の修懺と四時の坐禅、夏冬の二季は三時の修懺と二時の坐禅をして、隨時不退の修行を営むところである。中央の弥陀宝殿の前には蓮池をうがって西方淨土の宝池をあらわし、そのうしろに阿弥陀仏の聖像を尊崇して、この行法の不退堅固なることを祈念するものであると述べ、委曲は「十六観堂勸進疏」にありと註記している。

これに対して真言院は長日瑜伽の行法を修し、あるいは隨時

に受法灌頂などをこの院において行なりべきものとした。入宋僧俊苾によって泉涌寺に移植された十六観堂は、真言院に對する天台止觀の道場であつた。

五

天禧元年（一〇一七）知礼は同志十人とともに、焚身供養の誓いを立て、法華三昧を修したとき、翰林学士楊億は知礼を諫めて、その意思を翻すことを請うた書簡を贈っている。これに對する返書の中で、知礼は「唯心の浄土に往生することを求め、本性の弥陀を見んことを願う」と述べている。ここに言う「本性弥陀・唯心浄土」の思想は、さきの觀經疏妙宗鈔に説かれた約心觀仏説がその根柢となつており、これが趙宋天台におこつた十六観堂の実践の眼目であつた。

嘉定三年（一二二〇）俊苾は、秀州華亭県の超果寺天台教院において、北峰宗印和尚から師資相伝の法門として、北峰法語と唯心浄土説を授かつてゐるが、北峰和尚はこのとき浄土説とともに、遵式の浄土決疑行願の一本を俊苾に託して、唯心浄土の説を生涯つくして安養に歸する誓いを立ててゐる。これはさきの往生浄土懺願儀とともに十六観堂における長期修懺の行儀となつたものと思われる。帰朝後、嘉祿三年（一二二七）三月十三日、俊苾はこの唯心浄土説を書写して、本九条道家に授けたが、その末尾に「唯心の西方に生じて、本

性の弥陀を見る符契となす」との旨を記している。これが泉涌寺俊苾法師の思想と信仰の歸結であつた。

六

古雲元粹の述作「観堂長期修懺規式」の内容を明らかにすることによつて、趙宋天台における十六観堂の実践の在り方を窺ひに、修懺の行儀は差別した弥陀懺法だけでなく、ひろく戒定慧の三学を含む四種三昧が修せられた。これが言わば弥陀懺法によつて統一されてゐたのである。それゆゑ四明天台の法華懺法と弥陀懺法とは表裏一体のものであり、その実践の眼目となつたのが「本性弥陀、唯心浄土」の思想であつた。ここにいわゆる趙宋天台と浄土教の相即一致のすがたが看取されるのである。我國の俊苾法師によつて東山泉涌寺の十六観堂に移植された諸種の懺法は、宋土の風をそのまま伝えたもので、それは四種三昧の一つといった相対的な取りあげ方ではなく、これを全面的に移植したところに俊苾自身の面目があつた。これが鎌倉時代の浄土教にどのような影響を与えたかは、別に考えるべき問題であるが、少くとも親鸞聖人の思想形成の上に多大の寄与をなしたことは銘記すべきである。要するに泉涌俊苾による趙宋天台浄土教の実践面の受容の歸結は、この十六観堂の長懺儀にあつたと言えるわけである。

1 「清衆規式并十六観堂記」は、俊蒔法師が泉涌寺の殿堂とその行儀を大宋の規模に倣って施行した記録集で、これには泉涌寺、野中寺および竜谷大学図書館（妙観院旧蔵本）に所蔵する江戸時代の古写本がある。このうち野中寺本によると、その内容は、

一、清衆規式 建保三年八月 日

二、泉涌寺遺囑詰文 嘉禄三年三月十二日

三、泉涌寺殿堂房色目 承久二年二月十日

四、後架禁制 方丈在判

五、禁常住物借用 方丈在判 承久三年八月十六日

六、法塔後屏風銘 嘉禄二年四月八日

七、繪旨 嘉禄三年八月十七日前土佐守在判

●八、観堂長期修懺規式 南宋宝慶元年六月八日 天竺元粹述

九、先師北峰和尚法語 嘉禄三年三月十日 俊蒔謹書

十、北峰伝付唯心浄土説 嘉禄三年三月十二日 俊蒔謹書

十一、義站不可刹那無此君 嘉禄三年正月十九日 俊蒔謹書

十二、泉涌寺僧職次第 嘉禄三年三月六日

十三、泉涌寺作法 鐘・鼓・板

十四、首座大衆遺誥 嘉禄三年三月八日

十五、東林十六観堂（勸進疏） 建保三年八月 日

の十五文を集めて、首尾の二文をもって題名としている。泉涌寺開山俊蒔律師の遺文を、寛永元年（一六二四）十二月、絮秀が法音院の写本から転写し、これに増補したものである。なお本書は、先年土橋秀高教授が戒律章疏に関する資料調査をされたとき、たまたま河内野中寺で発見され、すでに公開された

趙宋天台と浄土教（中山）

ものである。『鎌倉仏教成立の研究 俊蒔律師』（資料篇）――

俊蒔律師遺文――参照

2 宝慶元年（一二二五）六月八日、天竺住持元粹述「観堂長期修懺規式」一卷は、俊蒔の帰朝後十数年を経た法師の晩年に成るものである。その内容は、一謹護身口、二存心発心、三精習經懺、四嚴事道場、五正明修行を略述して、観堂において長期の修懺をなす者への規式とした。本書の奥書に、「日本建長二年（一二五〇）暮春四月五日、泉涌寺住持智鏡自筆書写、此文以置観堂方来行人依而勿違而已」とある。暦仁元年（一二三八）智鏡は入宋して律を伝え、また浄土教を学んで帰朝し、のちに泉涌寺第四世の講席をついでその学ぶところを弘通している。これは智鏡が入宋したとき請来して、泉涌寺十六観堂に掲げて行人の誠めとしたと考えられる。（紙幅の都合上、本文とその説明は省略する）

（龍谷大学教授）